

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

三 谷 正

- (1) 序
- (2) 「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」との関係
- (3) 「指環と書物」と従来の叙事詩との相違
- (4) 「指環と書物」の書名の意義
- (5) 事実と想像との関係
- (6) 結び

(1) 序

ロバート・ブラウニングは、かれの熱愛おかざりし妻エリザベス・バレット・ブラウニングの死に直面し、人生の悲しみの絶頂に達し、深刻な悲哀とそれとの闘への苦悩の体験の結果、妻の死後、八年の長年月を費して、偉大な傑作「指環と書物」を世に残したのである。それまでは、詩人として、夫人の方が、よりよく世に知られていたのが、この詩によって、夫人にもまして英国第一等の詩人であることが認められるに到ったのである。「指環と書物」はブラウニングの詩論のすべて、技巧のすべてを尽して書かれ、ロマンティズムとリアリズムの両面があり、詩的で、劇的であり、且つ小説的であり、しかもそれが一つの話を登場人物それぞれの立場からの多方面から話すという新しい創造をなし、かれの詩の一大殿堂の観がある。この書は一八六九年の出版とされ、全巻十二巻、二一一三四行からなる大作である。ブラウニングがこの大作を創るに際し、材料として用いたのはイタリーの古書で、かれ自らが「指環と書物」の中で「四角の古ぼけた黄ろい本」^①と言った殺人事件

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

を扱った訴訟事件の記録の書である。ここに、この古書と「指環と書物」の関係、また、「指環と書物」が従来の叙事詩といかなる点に於て異なるかを調べ、「指環と書物」の創作の動機と創作の過程を検討してみたいのである。

(2) 「四角の古るぼけた本」と「指環と書物」との関係

ブラウニングはこの詩の材料をフロレンスの古本屋で入手した一巻の半皮紙の古書から得たのであった。これをかれは「指環と書物」の中で「四角の古ぼけた黄ろい本」と言っている。この古書は、ブラウニングが、或る日、フロレンスの広場を散歩していたとき見つけたものであった。その広場には古い額椽、ふちの欠けた鏡付きの燭台などの古道具、石の標本、種々の古びた胸像、錦欄の檻襖切れ、蝕んだ版画などであつた。その古物商の列ぶ市場があつた。その一軒の掛小屋の、がらくた品の中から、見つけたのがこの古書であつた。この古書には、ラテン語の題字がついていた。ブラウニングは「指環と書物」の中で、これを次のように訳している。

「ローマの惨殺事件、

貴族ギドゥ・フランチェスキニと、

かれに雇われた四人の刺客と

総勢五人、

裁判の審理にかけられ、

有罪と判定し、

キリストの救いあって以来

一千六百九十八年、

三月二十二日

ローマに於て、

身分に於て、

或は断頭、或は絞首の

死刑に処せられし

犯罪事件のすべての立論。

ここに、夫が姦通せる妻を

殺せる場合、

慣例の刑罰を免れ得るや

否やが論ぜられている。^②

と。これは、また、同じく「指環と書物」の中でブラウニングが

「逐語訳にすれば、

表題は、そう書かれている。

殺人事件と言えば、それに違いはない。

しかし、また、一面、

誤って殺人事件と書かれたる

他の犯罪の、

法に照らして調ぶべき

刑罰事件とも言い得らる。^③」

と言っている通り、この古書は昔ローマに起った殺人事件を取扱っていることは勿論ではあるが、更にこれに関連する他の幾つかの訴訟事件を含む法廷の、弁論とその反論及びこれに関係のある手紙など十八箇のパンフレットから成っているのである。そして、この古書は、当時までのローマに於ける裁判の歴史をも物語っているのである。即ち、当時の裁判の慣習として、今日とは異り、口頭でなく、文書の上だけの裁判が行われたという事実及び、その文書上の裁判の判決のすべて、即ち判決の全歴史とも言ふべきものがこの書に述べられているのである。そして、

「四角の古ぼけた黄いろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

この判決の歴史に基づいて作り上げられた弁論とその反論、また、被告の供述と証拠、証人の証言、惨殺者の処刑を主張するものの手紙、並びに惨殺されたポンピリアの無罪と、純潔を証拠立てる最後の判決の文書なども包含されているのである。そして、これらの文書はギドウ処刑の裁判に関心を持ち、手紙をギドウに差し出した人であって、ギドウ一門、即ちフランチェスキニ家に法律上の顧問とでも言えそうな職業上の関係のあったフロレンスの法律家によって蒐集せられ、一冊の本に纏められたものであった。そして、また、これはブラウニングが、

「形は本にすぎないが、実は、

二百年前、人の心臓が、激しく鼓動し、

熱い血潮に燃え上り、

脳髄が煮えたくぐり刺された

純粹の自然のままの事実である。

これは手に触れても

目で見ても、

魂の気付薬となるものだ。」

と言って、かれの心が強くひきつけられたものであった。しかし、これは前述のように法廷の弁論と反論であるため、一つの物語としての一貫したすぢはない。けれども、われわれとしては、この殺人事件が如何にして起り、何故に犯人が罰せられたかなどの一応のすぢを自ら立ててみなければ、この書の内容、従って、これを材料とした「指環と書物」の内容を理解しにくいのである。さればとて、一貫したすぢを立てようとすれば弁護側の言い分と、反論側の言い分と互に正反対であるため、弁護側か、反論側か、どちらか一方に片寄ることとなる。この片寄ったすぢの立て方では、この刑事事件の真相を伝えるすぢとは言えない。この困難にブラウニング自らもぶつかったのであった。しかし独創性に富んだかれは、この困難を困難と感ぜず、寧ろこれを利用して、自らの独創力を發揮しようとしたのであった。そこで、かれは、この事件の直接、間接の関係者のすべての人物をして、それぞれの立場から、それぞれの言い分を言わしめ、その間に、事の真相を把握しようとする仕組を考え出したのである。この理由から一つの事件を十回話す仕組にしているが、若しポンピリア以外のピエトロか、ヴィオランテのどちらかが、ポ

ンピリアと同じように重傷ながらも数日生きながらえ得たとすれば、十一回話すようにしたかも知れず、ピエトロ、ヴィオランテ兩人が生きながらえ得たとすれば十二回話すことにしたかも知れない。その場合、「指環と書物」は巻数十二巻が、十三巻或は十四巻になっていたかもしれないと思うのである。故にエドワード・ダウデンは、

「この物語は殆んど同数の話し手によって十回話されていると屢々言われる。しかしこれは一貫したすぢのある話としてはただの一回も話されていないと言う方が正確に近いであろう。その理由は九人（ギドゥは二回登場するので九人になる）の話し手が九つの別々の話をなし、しかも、それぞれの人物が別々の出来事に就て話しているからである。例えば、ギドゥの語るポンピリアと、カボンサッキの話すポンピリアとは、空に輝く星と沼沢地に立ちのぼる焰のように遙るかけ離れたものである。その他の物語も同様である。結局、読者の側のわれわれが、物語を自ら造り上げるにまかされている。尤も相つづくそれぞれの人物の話す言葉は、人間証言の幾つかの価値識別の鍛錬となり、事の真実への充分な道しるべとならぬではないが。」^⑤と言ったのである。従つて、ここに古書の十八箇のパンフレット及び「指環と書物」の各登場人物の独白により、われわれ自らが、それぞれ一応のすぢを立て、この詩を理解して真実の追求をなすべきである。われわれが、こうして、一応のすぢを立てれば、この物語の面白さは興味尽きざるものがある。しかしこの面白さもさることながら、この物語の詩として、また叙事詩としてわれわれの心に強く訴えるものは何と言つてもやはりブラウニングの想像力の深さ及びその表現にあるのである。もともとこの古書は刑事事件の論告と反論といった粗笨な素材であつて、その儘では、文学的要素はあるにしても、文学的香りのあるものではなかつた。然るに、ブラウニングはこの粗笨な素材に、かれの深遠な想像と変化豊かな、しかも極めて巧妙な比喩的表現を以て、この偉大な叙事詩を創り上げたのであつた。

(3) 「指環と書物」と従来の叙事詩との相違

ここにブラウニングの創り上げたこの叙事詩は、すでに述べたような材料、即ち殺人事件という日常茶飯事を材料とした点に於て従来の叙事詩とは大いに異つたものであつた。従来の叙事詩人は、その材料を取り上げるに際し、多くは一民族の伝説、或は、一民族の間に空想的に存在する神話の類を用いるのが普通であつた。言わば、従来の叙事詩人は一般の人々から既に重要なものとして熟知されているものに就て歌つたのであつた。然るにブラウニングは、普通には些細なものとして卑まれ、無視されているものを取り上げて詩に歌うのであつた。これはブラウニ

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

ングが、極めて卑近なもの、取るに足らぬかに思える人間の行為、無知とも思える人間のものの考え方といったものうちに真実が宿り、人間の真情を見出し得ると考えたからである。これはワーズワースが、当時の爆弾的宣言とも言うべき「抒情民謡集」の序文に於て、日常茶飯事を日常語を以て歌うべきことを主張して擬古典派の詩人の詩語を用い、特殊な題材による人為的技巧を排除したのと、その精神は軌を一にするものである。ジー・ケー・チェスタートンの言葉を借れば、

「ホーマーは人間界のすべての武人のうち、最も強い男性の戦と、すべての女性のうち、最も美しい女性の愛を歌い、旧約ヨブ記の作者は太古以来の悲しみの物語を語って、旋風に聞える神の声を伝える。ヴァーヅルはこの世に於る最も偉大な民族の起源と、最も不思議な都市の建設を物語る。ダンテのそれは、霊界の機構の覆を除いて、自らの聞きたるままの神の報を響かせる物語である。ミルトンのそれは万物の始めと、時の始めの薄明に於る邪悪なもの最初の物語である。そして、それらはいづれも、その物語によって、人間の天国への関係を示すものである。然るにブラウニングのそれは、最も卑しまれ、最も完全に忘れ去られたものの中から選び出し、しかも人類の名を汚すとも思える最も悪質なイタリーの殺人事件を物語ることによって、人間の天国への関係を示すのである。従来の叙事詩はすでに重要なものとして熟知されている事件、英雄、偉人によって、偉大な民族の予言書となり、力強い人間救いの説話となったに反し、ブラウニングのそれは、かれが出づるに到るまで、どこかに隠され、人に知られずにあったものが、その隠れ場所から飛び出して、かれの目に止まり、一般の人の目からは隠されてはいるが、些細なもの自らのもつ神秘的な力によってブラウニングの心を打ったのである。」と。ブラウニングは、チェスタートンの言う些細なものもつこの神秘的な力を認めただがために、

「この書物の中に絶対的の真実があった。」

空想の含まれない事実があった。」

と古書に強く魅せられたのであった。オスバート・バデットも言っている。

『指環と書物』は、従来の伝統的な叙事詩とは、英雄的行為及び英雄物語を避ける点に於て異っている。

夫ギドゥによってなされたポンピリアの惨殺は、普通の人間に関する世間普通の惨殺事件である。然るに、この世間普通の人殺しの処刑の経緯に就ての法廷の報告から滲みでた激烈にして、多岐にわたる興味を喚起したのが、世の傑作として、後世に残されたこの詩である。物語の中

には、悪党もいれば貴族もいる。しかし怪異と言われ、巨人と称せられる程の人物は一人もあらわれていないのである。」^⑧
と。このバーデットの言葉は、また、チェスタートンの言う

「古い叙事詩人とブラウニングの相違は龍と闘った時代と、微生物と闘う時代との大いなる相違がある。」^⑨
と同じ心ではないか。

この些細なものの中に重要な意味を見出すという精神は、この詩に於る事の真相を究めるといふ点の一つの鍵ともなるものであり、ブラウニングの近代的精神を示すものである。

ギドゥ、アレゾウの長官及びパオロは、かれらの社会にあつて重要な人物かもしれない。これに反し、ギドゥの女中バティスタは取るに足らぬ人間であるかもしれない。しかしバティスタの人間性は、ギドゥ及びギドゥの母ベアトリチェよりも遙るかに上にでるかもしれない。従つてかの女の証言は、長官マルティ・ディチの手紙よりも信頼を置けるものであるかもしれない。また、重傷のポンピリアの傍にあつて、親切の限りを尽し、看護、祈禱に奉仕した身分地位の低い医師及び尼僧の証言は、高官の僧侶官吏よりも真実に近かつたのではないか。特に、身の素性は卑しくとも、純情潔白のポンピリアの証言、即ち、夫ギドゥからは虐待に虐待を受け、両親からは実子でないと言われ、剩え、その最後に到つて、夫よつての両親の惨殺という悲惨事を自らの目を以て見、しかも自らも亦重傷を負い貧窮院の病床に横えられるという憂目を見ながら、悪逆非道の夫ギドゥを許す言葉を残して昇天するに到つたポンピリアの証言、これを真実の叫びと言わずして、何をか真実と称すべきかと言いたい程である。ブラウニングは「指環と書物」に於て事の真実に関し、

「生きとし生けるものすべて、

幾多の教訓を垂れるものなり。

われらこの物語より、

一つの教訓を学び取れかし。

人の言葉は空虚なり、

人の証言また虚偽なり、

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

人の評価は風の如し。^⑧

との信条を有し、原告、被告いづれにも組せず、両者にそれぞれの立場を徹底的に語らせ、公平の態度は失っていないのではあるが、しかし、この叙事詩全体に漂う創造的情調からすれば、結局、ブラウニングはギドゥよりも、カポンサッキ、及びポンピリアに軍配をあげたのではないかと思えるのである。これは、ブラウニングが材料の撰択に於て、従来の叙事詩人のように、英雄、勇士の大事事件という既に重要なものとして認められたものを取らずして、卑近なローマの殺人事件を選んだことから推察し得られるものである。かれはこの物語に於ては、登場人物の重要性に於て、貴族、高官よりも、低き身分の僧侶、また庶民により一層の注意を向け、重要視していると思えるのである。

かくして、ブラウニングは、極めて些細な日常茶飯事、否、取るに足らぬ卑近なものに見え、しかも甚だしく粗笨な素材を把えて、自らが平素貯え来たった豊かな想像力をこれに加え、従来の叙事詩人に劣らぬ高遠な人間の理想、神韻漂渺とした人間の夢、広汎な人間社会の問題を扱って、ここに世にも稀な叙事詩「指環と書物」を創り上げたのであった。

(4) 「指環と書物」の書名の意義

「指環と書物」の書名の意義はブラウニングが自ら明らかに説明しているもの即ち明示的意義と、かれが暗示的にしか示していないものとの二つの意義がある。先づ前者、明示的のものに就ては、次の二つのことを考えねばならぬ。その第一は指環という言葉及び書物という言葉のそれぞれがどんな意味を持っているかということ、その第二は、書名が「指環と書物」となっているにかかわらず、この叙事詩中の序詩の第一巻も「指環と書物」となっていること及び跋詩の第十二巻が「書物と指環」となっている理由は何であるかということである。先づ第一の問題、即ち「指環と書物」の指環及び書物の言葉はどんな意味を持っているか。書物は、さきに述べたブラウニングがこの詩の材料として利用したローマの殺人事件の訴訟手続の書かれた古書のことである。指環は、われわれが平素用いる指環がその材料の純金から精巧な指環に作られるまでの製作過程をこの叙事詩の成作に適用したということ即ちブラウニングの想像力をあらわすのである。ブラウニングはこれを次のように説明している。鋳山から出て来たばかりの粗金を鋳の目、槌の打撃に堪えるようにするには合金が要る。この合金にあたるのが詩作の際のブラウニングの想像力に当るのである。フロレンスの古書に含まれていた殺人事件という粗雑な死んだ材料が、ブラウニングの想像力によって、肉がつけ

られ、血が通わされ、ここに詩的に生かされたのであると。このことを示す意味で、即ち

ブラウニングの想像力 + 古書
 ↓
 The Ring and the Book

が書名となったのである。第二の問題の一つ、即ち第一巻が何故に、書名と同じ「指環と書物」となっているかの問題である。それは序詩の第一巻に前述のこの詩の製作過程をブラウニングが自ら説明している事実を示す意味で、

わが想像を 加えた この古書に
 ↓ ↓
 The Ring and the Book

と改めて明示したのである。第十二巻が「書物と指環」となっているのは、序詩と跋詩は始めと終りといった正反対、若しくは対句的になっているため修辭法の交叉対句法（暗示的意味のところで説明する。形はAB:BA）に従って、

古書に 加えた わが想像を
 ↓ ↓
 The Book and the Ring

としたまでである。しかし第十二巻が「書物と指環」となっている所を、

古書 から生れた 叙事詩
 ↓ ↓
 The Book and the Ring

と解すると、暗示的意義の糸口が得られるのである。この場合の書物は、書名の書物と同じく古書を指しているが、この指環は、書名の指環と異なる。ここでは純金の粗金から前述の経過を辿って出来上った指環、従って古書的事实にブラウニングの想像を加えて出来たこの叙事詩を指しているのである。この指環が叙事詩を指すことはブラウニングが「指環と書物」の第一巻の開巻最初の行に

「この指環どうですか」^⑥

と言ったり、また、同じく第一巻で、古書のことと言及する言葉のうちに、出来上った叙事詩のことを指環と云って次のように歌っている。

「これがこの本の全体である。」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

ここまでが事実である。

まだ鍛えられていない黄金である。

まだ細工されていない事実である。

指環ができる前の地金である。^⑧

と。また、第一巻の終りに近いところで、

「このような苦心が、

このような結果をもたらした。

かくして、わたくしは、

このような合金の助成によって、

この弧を作り、一噴出に、

合金の有頂天を取り払い、

遂に正真正銘の純金となし、

この指環に丸めあげたのである。

この銘刻なき指環、

これはわたくしのみの

ものなのか。^⑨

とも言っている。これらのブラウニングの言葉を考えると書名の指環にも、第一巻のタイトルの書物にも明示的意義以外に暗示的意義も含まれていることが推察されてくるのである。そこでこの暗示的意義に触れてみたいのである。ブラウニングは古書を発見したとき、

「(運命というものに注意してもらいたい。)

いつも、わたくしの肩の上にある運命の

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

(2) Meeting at Night : Parting at Morning

(3) The Italian in England : The Englishman in Italy

また、交叉対句法としては、

Love in a Life : Life in a Love

などがある。そこで、この修辞法の交叉対句法を念頭に置き

(第一巻)

(第十二巻)

The Ring and the Book : The Book and the Ring

(因縁運命を示す)

の關係を見ると、最初の The Ring と最後の the Ring の間に、目に見えない因縁、運命のあることが暗示されていると見るのである。かく考えて来ると、「指環と書物」の書名は常に前述の前者即ち明示的解釈と、この後者の暗示的な解釈の両者を念頭に於て深く考えるべきものと思うのである。従つて書物は材料となつた古書、出来上つた叙事詩の二つの意味を指し、指環は、エリザベス夫人がブラウニングに贈つた指環、この叙事詩の作成過程を指環製作の工程に擬えたこと従つてブラウニングの想像、及び、出来上つた叙事詩の三つの意味があると思うのである。これに就て、ジェー・エム・コーエンは次のように言っている。

「ここに指環は二つの象徴をもつこととなる。一つは、この叙事詩がその頌として献ぜられたエリザベス夫人とブラウニングとの結婚の指環を意味し、今一つは事実とフィクションとの結婚、即ち人生の生々しい事実から、合金即ち詩人の想像力によって産み出された純金の指環のこの叙事詩の意味である。従つて書物は人生の生々しい材料の古書、指環は精錬され、精巧に裝飾の刻まれて出来上り、亡きエリザベスへの最高の頌となつたこの叙事詩である。」

と。しかし、コーエンのこの言葉は、わたくしの解釈と大体一致するのであるが、更に指環の運命、因縁を示す考えからの、書名の書物にも出来上つた「指環と書物」なる叙事詩そのものをも暗示する点にも触れて欲しく思うものである。しかしコーエンは更に、「惨殺されたこの詩の女主人公ポンピリア、かの女があつた驚くべき若さにあり、しかも日々の曇り勝ちな悲境にありながら、僧侶カボンサッキの心を深く打つところから、かれカボンサッキが、かの女をはじめて見た瞬間に、永遠の女性の姿をかの女に見出し、かの女救出に苦心せしめたこのポンピリアに、

ブラウニングは己が亡き妻エリザベスの姿を見たのであった。^⑧

と言っている。ここにブラウニングが、ポンピリアに、己が亡き妻を寓するとすれば、献身的騎士的勇気を以てポンピリアを救出したカボンサッキにこそ、男性的、健康そのもののブラウニングが、病身であり、そして、頑固な父のもとに青春を忘れ、生の喜びを諦め、ただ病床の窓から雲の行き交い、空飛ぶ鳥に、せめてもの慰めを見出すに過ぎなかった孤独寂寞のエリザベスをその病室から救出したブラウニング自らの姿を寓しているのではなからうか。実に「指環と書物」一巻の長編の叙事詩こそは、全く以て、亡き妻へのブラウニングの痛ましくも深き且つ強き哀惜の情の追憶より創り出された相愛の情の床しき頌であったのである。この故にこそ、この詩の第一巻の終りに詩銘として次のように夫人を称えざるを得なかつたのである。

「ああ、抒情の君、半ばは天使、半ば鳥。

すべては驚異、烈しき情熱。

雄々しくも日輪に向いて馳せ登り、

清き蒼空に聖所を築き、

日輪に同じ情感をあかせし詩人の

中にひとときわ猛き詩人。

されど君も尚、心臓深江の地上の人なりき。

そは、仄暗き大地より呼ぶ声の

聖所の君に呼びかけて、

君の聖なる蒼色を真白にし、

君の栄光を失せしとき、

人のためにぞなるならば、

苦るしみ、悩み、死をも辞すべきやと、

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

降り来りし君なれば。

この呼ぶ声は、

君と共にありし日のわが声、

君が霊、昔と同じ霊ならば、

いざ、耳傾けて聞き給え、

援けの国より。

われ、いかにして始め得んこの詩歌を、

君に詩才あたえ、君に詩歌教えし神への供物を。

頭うなだれ、手をさしのべて、

君の援けを求めずしては。

道遠く、道暗くとも、

かつて、君の与えし優しの心、

かつては君の情感そのものなりしその輝き、

かつて、君が微笑はそのまま、わが祝福なりしものを、

すべて、かつて在りしもの、今、尚、あれかしと乞い求めずば。

われ、いかにして結び得んこの詩歌を、

わが手さし延べ、頭上げずば、

及び難しと見ゆれど、尚、憧れし

すべての希望、すべての支え、すべての報酬を、

清め返さずしては、

いと高き援けの国、君が家、天国に、

白光、君が顔ほころばし、

仄明り君が模裾をさすところ。」^⑩

(5) 事実と想像との関係

「指環と書物」の第一巻で、ブラウニングは材料と純金の粗金、出来上った叙事詩を純金の指環に譬えて、次のような意味の説明をしている。

「四角の古ぼけた黄ろい本」という材料の純金の粗金を「指環と書物」という純金の指環にする過程は、エルトリア人の金細工師が、純金の粗金から精巧な浮彫をした純金の指環を作る生産工程と同じであると。そして更に、指環の材料としての純金の粗金は、指環を作り上げるための槌或は鑪の目に堪えるにはあまりに柔かすぎる。それが槌や鑪の目に抵抗するに必要な力を得るには合金を混ぜねばならぬ。そして合金を混ぜて指環の原形を先づ作り、それに浮彫をほどこし、然る後、再び合金が除かれ純金の指環のみが残されるのである。思うに、ここにブラウニングの材料のこの古書も、また、ブラウニングの意図するところには不適當なものであった。しかし、エルトリアの金細工師の指環の材料は柔かすぎる処から合金が必要であったのであるが、同じ合金を加えるにしても、ブラウニングの材料は反対に硬く、粗く脆ろすぎる処から加えられた合金であった。ブラウニングの材料はそのままの状態では、それを鍛え接合し、丸めるには毀われ易いものであった。そこで、かれは合金、即ち想像という合金を加えるのであった。かくしてブラウニングは死んだ生命のない事実にかれ自らの生命の息を吹きかけたのであった。ブラウニングは言っている。

「わたくしの胸中の生命が、

胸中深き底に、

深海が深海を呼び起すが如くに

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

死にたるものを

蘇みがえらせる。^⑧

と。そして更に言っている。

「事実と融け合った想像は、
それだけ、拡充され、

また、一つの事実となる。

槍を一つ一つの環に通し、

環と環の間に、

一つの途切も生ぜぬよう、

一つ一つの環を弛みなく

結びつけ、

しっかりとした槍棒に仕上げる如く、

放任すれば、ばらばらなる事実をば、

貫き、糸通し、

一つの組織だった事実にするのは

想像である。^⑨

と。また、

「その本からこの詩が生れたのである。

それらの事実、

わたくしの想像が混ったのである。

.....
わたくしという物質が粗金の純金の中にしみ込んだのである。

その純金はこの物質と融け合って

恰好のよい指環に造られ

槌で打たれ、鑪やすりで擦られ、

指先で念入りに彫刻せられ、

飾り模様を施され、

最後に、清めの水で

洗われるばかりになっている。

わたくしというものが消えてなくなり、

全くのところ、この本そのものが

生成したのである。^⑩」

と。エルトリアの指環の場合は、合金は再び酸で溶かして抜き取られたのであったが、ブラウニングの想像は、ブラウニングの心の観照の鏡の間から飛び出して、ブラウニングから離れ、作品の中に突入したのであった。即ちブラウニングの肉体を離れて作品の中にしみ込んだのであった。ブラウニングの「わたくしという物質が粗金の純金の中にしみ込んで」そして「わたくしというものが消えてなくなり」ここに「指環と書物」という叙事詩が生れたのである。

今、ここに古書の一部とそれに対応する「指環と書物」の一部を取り上げてその実際をみてみよう。古書の記録から、われわれの立て得る一応の物語のすぢの一部即ち、ポンピリアのギドゥとの結婚に始まり、フランチェスキニ家とコンパリア家のアレゾウでの同居、その間のいまか評、両親のポンピリアを残してのローマへの帰還、その後に於けるポンピリアに対するギドゥの虐待、僧侶カポンサッキの救援までの古書の粗金の素材がブラウニングの想像が加えられると次のような精巧な詩的表現となるのである。

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「わたくしは偽せの星を見た。

これは、ただの沢さわの霧にすぎなくて、

地獄からの煌きらめきに、

星の形に粉飾されたものだった。

この沢の霧の偽せ星は、

何ともかんとも見分けもつかぬ隠かくの怪物、

二つのどす黒い悪鬼の動物、

一つは狐面、他は猫爪、

首魁ギドウの言葉によれば、

近親とかの、衣冠束帯の姿せる

神を愚弄しながらも

僧侶を装うアバトのパオロと

カノンのジローモの、

この二人の悪僧に、

或は抛ほうり上げられ、

或は引きづり廻されて、

荒れたる道を、

蹴り飛ばされてやって来た。

やがて、これらの悪僧二人は、

星に似たるこの毒虫を

ローマに転ころがし、そこに止め、
ポンピリアの甘き汁を
吸い上げ、吸収し、
かの女の魂を中核に
膨れあがった水泡を
再び、アレツゾウへ、
アレツゾウの宮殿へと、
転がし行くのであった。

この宮殿は、言わば、その昔、
地下の劫火に吹き上げられた水煙が、
日輪をも魂消たまげさせる
大地の割目ともいうべきか。
水泡はこの割目に触れて破裂し、
その毒気広く、遠くに飛散した。

.....
それでも欺かれたる老夫婦は、
空界の閻魔大王に、
かく、雲間に巻き上げられ
浚くわれ行くわが娘をば
岡越え、谷渡り、

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

荒野へも、海へも、何処へでも

ついて行くのであった。

わたくしは見た。かれら老夫婦、

心配の拳句の果に、何はともあれ、

この好色家庭にはいり込むのを。

悪しきものども、捕獲は間違なしと確信し、

手に手をつなぎ、円陣づくり、

捕虜の周りに踊るとき、

猿面の灰色の母、

顔しかめ、口歪めるをも、

はつきりと認めたのであった。

かれら夫婦、一度は、ひとたび

好色家庭にはいり込みはしたものの

悪しきものどもの虐待に、

おのが身の安全のため、

あさましや、愛する娘を、

敵の手中に残したままにローマへと、

帰り行き、安堵の胸を撫で下すのであった。

悪しきものどもこれを見て、

妨げられし憎悪の念をぶりかえし、

出来得る限りの復讐を、
取り残されし身体と魂こころより
搾しぼりとろうと画策した。
遂に、準備は完了した。
火はつけられた。
大金は据えられた。
忽ち、悪しきものどもは、
猥褻の環をつくり、
生贄は裸にされて匍伏した。
神は、いづこにお在わせしか。
雲間は裂けた。
叫びが起った。
轟音起り、火は消え失せて、
大金は、地響立てて
大地にひっくりかえるのだった。
悪しきものども、塵にまみれて
震え戦おのくのであつた。
そのとき、聖ジョージその儘に、
輝く甲冑の後光の中に、
若き、善き、美わしき僧、

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

腕に夫人を抱えて飛び出した。

素晴しき一瞬に夫人は救われて、

跡に何一つ残っていなかった。」

と。尤も第一巻は叙事詩の序詩であるため、物語の全体にわたる詩的表現の多いのは当然としても、第二巻以下、第十二巻までは、ブラウニングのリアリストとしての面が表われて、古書の実事の一つ一つを、いかなる些細な事実に到るまでも、少しも省くことなく綿密正確に描写しながら、その間に、或は擬人法、或は明喩、暗喩などの比喩の修辭法的技巧を縦横無尽に駆使しているその詩的表現は全く驚嘆に値するものがある。

かくして、昔のローマの訴訟事件という死んだ材料が、ブラウニングの想像という弾力のある、しかも、堅実な力ある手によって、此処に精緻な彫刻が施され、彼処に大きく人間の思想と感情を注入して、生きた精巧な芸術品として、われわれの面前に差し出されたのが「指環と書物」であったのである。

(6) 結 び

ここにかれの想像は、単なる一時的な思いつき、一時的な空想ではなくして、かれが常に、永遠の相の下に、人間の喜びと悲しみを見詰めてつ、深く人生に思いを致し、ひそかに、声なき声と語らいながら、裕く豊かに、かれの内心に貯えられた深遠な想像であったのである。これに就て、チャールズ・ホッデルは次のように言っている。

「ここに、真の芸術のあらゆる場合に於けるように、最終の仕上げを経て出来上ったブラウニングの作品の偉大性は、ブラウニングという芸術家の手に落ちた材料が好適のものであったに由るのではなくして、寧ろ、その材料を利用し得るブラウニングの心のうちに貯え保持されていた豊富な資源とブラウニングの能力に由るものである。臨終の際のポンピリアは万人の心を打つ処多く、これを伝えるフラ・セルステイノの言葉の中に、ブラウニングは悩める聖徒の暗示を得たものではあった。然しながら『指環と書物』のポンピリアは、人間愛と母性愛の情熱、及び、神への信仰のうちに、あらゆる霊的なものへのつながりを求める理想の女性へのブラウニングの深い洞察を具現したものである。また、ブ

ラウニングは、カボンサッキがポンピリア救済のためにはあらゆる危険に身を投ずる確固不拔の男性たることを、古書に於て突きとめはしたのであった。しかしながら、ブランニングは、もともと、かれの心のうちに資源として絶えず保持していた所の男性的献身、騎士的勇武、邪悪に對する激しい義憤、靈的慈悲心と敬虔の念から、『指環と書物』の中には、かれ自らのカボンサッキを創り上げているのである。古書の中に、ギドウ及びその一門の奸計、貪慾、残虐性のあらゆる形向を見出したのはあったが、現実社会にあって、邪悪なもの強き、現実の人間のあまりにも卑しい人間の形相をとるに到るまで暗黒の墮落の淵に沈みゆくことを、かれ自らが深く覚れる所より、かれ自らのフランチェスキニを創り上げているのである。かくして、かれは、古書の事実のあらゆる箇所自らを鑄込め、多年自らの心と人の心の中を探求するうち自らの想像の中に、それが成長したとき、それをこの悲劇として世に送り出したのであった。偶然に見出された『四角の古ぼけた黄ろい本』が、全能の神の眼前に於て浮世の劇を演ずるとき、人間の心とその動機に関連するすべてのものに就き、詩人でブラウニングをして、その深遠な発言をなさしめたのであった。」と。

註

- ① Robert Browning: *The Ring and the Book*, Book I, l. 33.
- ② *Ibid.*, ll. 121—131.
- ③ *Ibid.*, ll. 131—134.
- ④ *Ibid.*, ll. 86—90.
- ⑤ Edward Dowden: *The Life of Robert Browning*, Chapter XII, p. 256.
- ⑥ G. K. Chesterton: *Robert Browning*, Chapter VII, pp. 163—165.
- ⑦ Robert Browning: *The Ring and the Book*, Book I, ll. 143—144.
- ⑧ Osbert Burdett: *The Brownings*, Chapter VI, p. 287.
- ⑨ G. K. Chesterton: *Robert Browning*, Chapter VII, p. 165.
- ⑩ Robert Browning: *The Ring and the Book*, Book XII, ll. 832—836.
- ⑪ *Ibid.*, Book I, l. 1.
- ⑫ *Ibid.*, ll. 364—366.

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

「四角の古ぼけた黄ろい本」と「指環と書物」

- ⑬ *Ibid.*, ll. 1386—1390.
- ⑭ *Ibid.*, ll. 40—41.
- ⑮ J.M.Cohen : *Robert Browning, Chapter V*, p.114.
- ⑯ *Ibid.*
- ⑰ Robert Browning : *The Ring and the Book, Book I*, ll. 1391—1416.
- ⑱ *Ibid.*, ll. 520—521.
- ⑲ *Ibid.*, ll. 464—468.
- ⑳ *Ibid.*, ll. 679—687.
- ㉑ *Ibid.*, ll. 544—588.
- ㉒ Charles W.Hodell : *The Old Yellow Book, Introduction*, pp.15—16.